壁が幾重にも圍まれ、建築の各部や裝飾の主想は飽くまで繰返へされ、終に神像の座所を得る爲に、其の中央の塔下に薄暗い押潰されさうなさゝやかな小房があるに過ぎないものになつて了ふ程、あらゆる無駄な手を入れてゐる。斯くも偉大を事をし、裝飾に過ぎてゐるのは、日本の神社佛閣の優雅簡素なのを見た眼には、之を以て、熱帶の自然の飽く程豐饒な中に住んで、精神を混惑し、趣味を殺滅した熱帶人の作である事が肯かれるのである。然し恐く、此の建築と日本のとの對照といふ事で、其處に興味を起される事もあらうし、又、凡てを無理强ひに嘆美しなければならぬ事はないにしても、少くとも、凡てを知つておく事は大切であり、アンコールにした所で、之が多くの訪客を引き附け、嘗てその豫想に反したのを聞かないのであるから、之にも其の魅力と興味とがある筈であると信ずる。

之から道をアンコールに取るとして、忌憚なくいへば、自分は、單なる遊覽客の見物をする積りであり、――恐く諸君も之を擇ばれるものと思ふ。――先づアンコール・ヴト Angkor-Vat に巡つたとして、其の彫刻を施した長廊は此種